

第四章 奈良の近世文化

第一節 近世初頭の奈良文化

性格と特色

十三世紀以後のわが国は、武士団の活動が目ざましくなり、荘園領主としての貴族や寺社は次第に衰運をたどったけれども、荘園領主たちの集まっていた京都や奈良は、長い伝統をもっていただけに、やはり依然として文化の中心をなしていた。たとえば禪宗にしても、それがわが国の文化のなかに定着するためには、京都という舞台が必要であった。その結果として、十四世紀から十六世紀にかけて、京都では貴族や旧仏教の僧侶のほかには武家と禪宗の僧侶と新興の富豪とがこれに参加して、禪宗色の豊かな室町文化の花が開いたのである。

ここでこのサロンの文化的担い手に富豪が加わっていたことは、その背景に十三世紀ごろからの庶民層の成長があったことを物語っている。そしてこのことも関連し、また都鄙の往来も繁くなったことも影響して、中世末期の文化は、庶民のなかに育ってきた地方文化の都への流入と、中央文化の地方への拡散という現象をもともなっていた。

このような状況のなかで、寺社勢力がなお衰えず郷民の成長も著しい奈良は、京都を中心とする文化圏内の副都心として、しかも京都とは違う特徴のある文化をもっていた。南北朝六〇年の戦乱から戦国の動乱期にかけて、奈

良は武士団活動の本舞台とはいえなかったし、また興福寺が政治的にもお庄倒的な力を誇っていた。したがって禅宗が直接的に奈良の文化を特色づけることは少なかった。こうして奈良では興福寺・春日社・東大寺などの僧侶や社家の人々を中心とし、衆徒国民といわれた武士化した豪族や、有力な郷民がこれに加わって、中世末期の奈良文化を彩ったのである。

奈良を含む都の文化圏の中では、奈良は京都ならびに堺との間に密接な交流をもっていた。興福寺の両門跡をはじめとして、奈良の僧には京都の貴族出身者が多かったし、商人の交通も頻繁であったから、奈良と京都の文化はとくに一体の観をなしていた。ことに応仁・文明の大乱にさいしては、戦乱の京都から疎開してきた人が多く、一条兼良はその代表的な人物として知られている。この当代一流の文化人兼良の奈良滞在は、奈良の文化に大きく影響した。その後、たとえば書で有名な三藐院近衛信尹（さむらひのふた）は天正二十年（文祿元年）一時兄の一乗院尊勢をたよって奈良に身を寄せている。つぎに奈良と堺とは、すでに堺が漁港であったころから深い関係にあったが、貿易港となつてからは商取引も盛んに行なわれた。堺の大火に当たつて奈良に多数の避難者があり、小西氏の一族葉屋甚介・宗芳父子が定住したといわれるし、また茶会の交歓もしばしばみられるなど、その交流の深さが察しられる。

中世末期のわが国の文化は、都の文化圏によって代表されるが、それはこの三都が一体となつて生み出したものであった。そして三都の間にはそれぞれの特徴があったのであって、京都の文化は貴族的禪宗的色彩が強く、堺の文化は町衆的異国的な特徴が目立ち、奈良の文化は寺社的な伝統の強さを持っていた。しかも三者ともに新興の町衆に支えられ、高度な文化を誇るものであった。

戦国の争乱と新しい封建権力の樹立とによつて、全国の寺社は深刻な打撃を受けた。奈良においても、永祿十年（一五七）松永氏の兵乱による大仏の炎上は、奈良中を恐怖と悲嘆とに陥れたのであった。総じて戦国以来の兵火に

よって災を被ったものには、この東大寺のほか、文正元年（一五二〇）閏二月に炎上した忍辱山円成寺、文龜二年（一五〇三）の西大寺、享祿二年（一五三〇）の薬師寺金堂、三好松永の乱における奈良北部の般若寺・法華寺や南部の白毫寺・弘仁寺・正暦寺・帯解寺などがある。また天正年間になっては井戸氏の兵火で超昇寺も焼けている。なお中川寺は文明十三年（一四八二）に寺内の争いによって焼けたといわれる。

しかし、このような被災に追打ちの形で寺社に大きな痛手を与えたのは、織豊政権による寺社領の制限であった。信長は寺社側の提出した指出に対しては一応これを認めてはいるが、秀吉は興福寺の書上げに対しては削減を加えてこれを威圧する態度に出た。ついで徳川家康は諸寺社に知行高をきめて朱印状を下付したが、それはさきに表示したとおりである。近世におけるこれら朱印寺院は、大小の差はあっても多くは中世には土地と人民とをあわせて支配する形の領主であったから、知行高の確定はその領有支配関係を根底から改められたことになり、その經濟基盤を制約されたことになるわけである。

知行高の決定とともに寺社には種々の規制が加えられた。秀吉はすでに僧侶に対して綱紀を肅正し学間にはげむべき趣旨の制令を出しているが、これは江戸時代の寺院法度の先駆をなすものであった。家康は、有力寺院に対しつぎつぎに法度を出したが、これらが寺院側にとってはあらゆる点で大きな制約となった。

全国的にこのような状況の展開するなかで、大和はそれでも他の諸国や京都などと比較すれば、なお平穏な方であったといってもよからう。ことに町の部分については、天文一揆による焼亡と大仏の炎上前後の動乱を除いては大きな災を被らず、春日祭も絶えるということはなかった。比叡山を焼打ちして年来のうっ憤を晴らしたといわれる信長さえも、「大和ハ神国ニテ往代ヨリ在三子細、其人存知事也」といって、奈良には手をつけなかったのである。

『蓮成院記録』には「近国社寺庵（道）導場悉以相果、仏法破滅之時刻、如_レ形寺門成等無_ニ別儀_一事、難_レ有_ニ神徳_一也」とそ

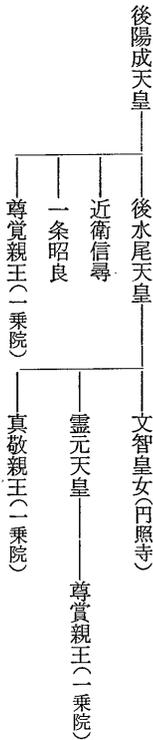
の感慨を述べている。大和の神社に対するこのような心遣いは秀吉にもみられ、天正十八年（一五九〇）には秀長の病氣平癒を祈念して春日社に米五〇〇〇石を献じている。また秀長は、九州から凱旋するとまず春日社に参詣し、関白秀次は文祿三年（一五九四）に軍勢三〇〇〇を率いて、はなやかに春日社にもうでたが、これらは王朝時代の春日もうでを思わせるものであったという。大仏と郊外諸寺の災厄を除いて、南都の諸寺が延暦寺や高野山・多武峯などの轍をふむことなく、ともかくもこの動乱の世紀をきりぬけ得たことは、南都寺院ことに興福寺側の態度にもよるであろうが、やはり奈良のもっていた特殊性によるものであった。それは、大和が民族の故郷であり、都と一体と考えられ、ことに神国と唱えられてきた伝統が、大和の人々にはもちろん遠く他国の人たちにも深く認識されていたからであろう。

戦国動乱のあとに安土桃山のいわゆる織豊政権が成立し、ついで江戸幕府が開かれ、破壊のあとの建設がはじまった。この風潮のもとで文化面では一種の復古主義がきたようにみえた。しかしこの再建も復古も実は新秩序確立への序曲にすぎなかったから、復古主義とみえる文化も特異な性格をもっていた。寺社復興に象徴される奈良の文化は、その意味で中世文化の掉尾の輝きにもみえ、また近世文化への変容の一步とも思われた。

十七世紀の前半は、こうした復興がつつき、安定への努力がつつくときであった。したがって、権力者側の体制の不整備のもとで、武士団には戦国殺伐の気風が残って不安定な心情があり、かつて町衆とよばれた富裕商人は新しい権力に結びつこうとし、権力者はまたかれらを抱えて官僚や御用商人としようとし、農民にはまだ規制はそれほど徹底してはいなかった。そのために、かえって自由な雰囲気はただよっていたといえる。この時代の人々が『慶長見聞集』にあるように、「扱もく／＼目出度御時代かな、我ごときの土民迄も安楽にさかえ美々敷こと共を見聞事の有がたさよ、今が弥勤の世なるべし」といい、『豊鑑』のなかで、「かかるめでたき御代に逢ひ奉る事、天の許

せる道にや」と述べ、憂き世を浮世におきかえたのは、この時代の自由さの反映にはかならなかつた。それ故このような時代は、ある意味では日本史上でも伝統が否定されるという非歴史主義の顕著な時代であつた。このような一般状況のもとにあつて、奈良も例外ではあり得なかつた。

この時期の奈良では、もう武士団に荒らされることはなくなつたし、寺社の復興は進行し、町自体は多聞城の運命とともに城下町となることなく、天領として奉行施政下に一まず安心することができ、周辺農村ではその領主もほほ落ちついた。この間に中世に成長してきた南都諸郷の郷民は、寺社への隷属から脱して新しい奈良町の町民に衣替えしたのである。このような条件とこの時代の現世謳歌の気風のもとで、僧侶・神官・町民・武人が一体となつた奈良の文化の花が咲き得たのである。かれらが混然一体となつて楽しんだサロンは、寺社を舞台としていたといえるが、むしろ奈良全体が大きなサロンであつたという方がふさわしい。実はそれほどに奈良の町民の力が伸びてきていたということができる。それとともに、元和・寛永のころを考えると、一乗院や山村円照寺と京都の朝廷との関係から後水尾天皇を中心とする京都サロンの奈良への延長という部面のあつたことも見逃し得ない。



そしてこのことの中に奈良の文化面における伝統の威力を見るのである。いわば非歴史主義の時代のもとで歴史主義的な文化の深さを示す奈良の近世初頭の文化は、その点において独自の意味をもつものといふことができよ

う。奈良のこの時期の文化に、こういう独自性を与えることができ、寺社文化に活が入られた理由は、奈良が商工都市としての活気をもっていたからであろう。歴史主義と非歴史主義、伝統と進歩、これら矛盾する二つの要素がこのうえなく融合して全国に誇る多彩な文化を展開させたのが、奈良の近世初頭の特徴であった。

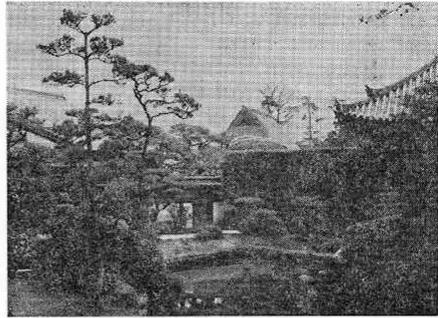
さて十七世紀も半ばを過ぎると幕藩体制が確立して社会はいよいよ安定してくる。そのことは諸種の規制が強化されることであり、自由がなくなることもある。平和のなかの安定は一般に活気を失わせるものでもある。江戸時代の中期がわが国全体にわたってこういう空気に包まれていくとき、すなわち元祿のころを境として奈良も安定の中に沈滞が目立ちはじめた。それでも十八世紀初期までは、やはり西鶴の描写にもみられるとおり、生氣のある商工都市の面目を保っていた。

寺社とその文化

寺社の復興 と 整 備

忍辱山円成寺の復興は非常に早く、炎上ののち間もない応仁・文明のころ(一四七〇年ごろ)狭川出身の知恩院院主栄弘阿闍梨によって現在の本堂・楼門などが再建され、また同時に焼失した大藏経のかわりに栄弘は高麗版一切経を請求したが、これはのち家康に献じられた。これによって同寺はさらに一〇五石の知行を加えられ、忍辱山村に二三五石を領することとなった。

法華寺は、慶長六年(一六〇〇)に家康が豊臣秀頼母子にすすめて再興させたものとして知られている。このとき本堂・南門・鐘楼が造営され、階段の擬宝珠にはその旨の刻銘がある。また知行地として法華寺村に二二〇石が与えられた。つぎに同寺の客殿は、三九世高慶尼(後水尾上皇皇女)のとき京都の由緒ある建物を移築したものらしく、



法華寺庭園

付設された玄關の棟木には寛文十三年(延宝元年 一六七三)の紀年銘があり、「仙洞うつし」とか「遠州好み」などといわれる庭園も、同じ寛文ごろの作かと考えられるものである。なお尼門跡の同寺には華道小池御流が山内に伝えられてきた。

薬師寺の金堂は、当時郡山城主であった増田長盛の発起によって再建に着手されたが、工事ははかどらず一応完成したのは寛永十二年(一六三五)であって、そのうち京都の町人によってさらに修造が加えられた。東塔は正保元年(一六四四)に修理され、南門は慶安二年(一六四九)に西院から移建されたものであり、寺領は六条村で三〇〇石であった。なお薬師寺の八幡社は慶長の地震で破壊したが、同八年(一六三三)に豊臣秀頼が片桐且元を奉行として再建したものである。

近世初期にできた薬師寺金堂は、古代のそれを考えれば完全な復興とはいえないかった。そこで白鳳の再現が計画され、昭和四十六年(一九七二)から復興に着手し、同五十一年に落慶法要が営まれた。

そのほか戦災にあった寺のうちでは、般若寺は般若寺村で三〇石を与えられ、寛文年間に金堂が再建された。ついで元禄年間になって慶長の地震で破損した十三重の石塔の解体修理があり、このとき納入物も発見された。この修理に関係するのであろうか、元禄十四年(一七〇七)四月には江戸両国の回向院で出開帳を行なっている(「藤光僧」正日記)。白毫寺は法華寺村と肘塚村で五〇石を領し、慶長年間に復興した。帯解寺は寛永年間に再興し、正暦寺は池田村で三〇〇石を与えられ、福寿院客殿は延宝年間に建てられた。また、弘仁寺の本堂は元禄九年(一六九六)に復興し、聖武天皇陵の守護寺である眉間寺は、多聞城の築造と侍屋敷を設営するために西方に移され、法蓮村で一〇〇石を認め



薬師寺図 絵は高島千春筆
(文化14年 高田与清『擁書漫筆』)

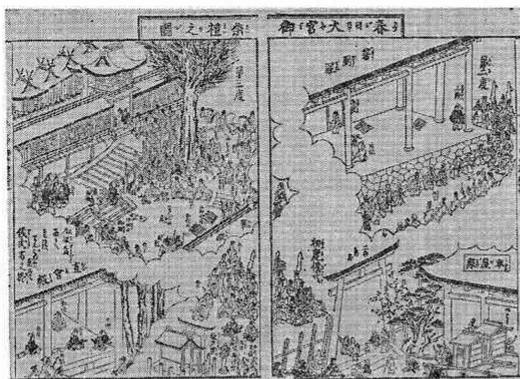


薬師寺東塔修理扁額 (薬師寺蔵)

られた。

東大寺の復興は山田道安らの努力にかかわらず遅々として進まなかった。そして結局元禄期の本格的な大仏復興となるが、その次第は奈良町の繁栄を語るものとして、さきに詳しく述べたとおりである。地震などによって破壊した唐招提寺の復旧も元禄時代になってからであったし、兵火の災にあった西大寺の復興も遅れて元禄のころから復興への計画が進められた。それらについては、元禄期以後の寺社の動向として次節にゆずることとして、つぎには近世初期に諸社寺の拡充整備されたものや、火災などにあいながら間もなく再建されたものなどについて記しておくこととする。

春日社は永徳二年(弘和二年)に全焼したが、そののちに復興してきていた。同社はさすがに中世に興福寺と一体化しつつ神威を誇っただけに、戦国争乱のなかでも馬蹄に踏みじられることはなく、江戸時代になっても数千石の所領が認められた。そして現在の中門・回廊・若宮社細殿・神楽殿なども慶長年間の建立である。さらに同社の二〇年ごとの本殿の式年造替についてみると、初めは神領に課せられて造宮預りがこの事を執行したが、中世には造国司による造替がおこなわれ、ついで足利將軍の春日もうでが恒例となるに及んで、將軍家



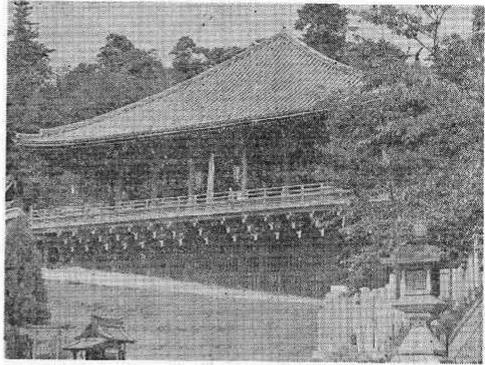
申 祭 『春日大宮若宮御祭礼図』

表80 春日大社造替年次

次	正 遷 宮	西曆
40	慶長 18.12.18	1613
41	寛永 10.12.14	1633
42	慶安 5. 6.11	1652
43	寛文 11. 6.28	1671
44	元禄 3. 6. 3	1690
45	宝永 6. 9.27	1709
46	享保 13. 6.29	1728
47	延享 4. 9. 5	1747
48	明和 3. 9.27	1766
49	天明 6. 4. 8	1786
50	文化 5. 2. 28	1808
51	文政 9. 4.27	1826
52	天保 15.12.12	1844
53	文久 3.11. 7	1863

大東延和氏作成の表による

によって造替がすすめられた。ついで徳川政権の代になると、幕府は造替料としてそのたびに二万石を寄進し、この行事は絶えることなく継続されてきたのである。そして旧社殿のうちには諸社に譲渡されるものもあった。また春日祭も遠く王朝の昔にその制が確立していまに伝えられているものであるが、それは早くから官祭とされて勅使も参向し厳肅なものであった。そのうち祭礼化して舞楽・神楽・競馬・相撲なども献納されるようになるが、なお武家の参加は拒否されたといわれ、この間、諍闘や争乱で欠けた年もあり、勅使の参向も絶えるようになった。祭礼日は古くから春二月と冬十一月の上の申さるの日と定まっていた関係で申祭ともよばれ、江戸時代にも年に二回の祭りが執行されたが、幕末元治二年（慶應元年）には古制に復して勅使の差遣となり、明治四年（一七）に祭日を春季一回に改められた。そしてこの祭礼費として幕府からは三三石八斗が別に支給されていた。



東大寺 二月堂

た。いづれにしても、春日社は江戸幕府の後援もあってその伝統文化を持続してきたといえることができる。

つぎに一乗院は寛永十九年（二四三）十一月に火災にあつて、禁裏から賜わった殿舎や東福門院の援助によってできた長講堂を失つたが、被災後、門跡尊勢の江戸下向やその坊官中沼左京亮元知らの努力によって慶安三年（二五〇）に再興した。

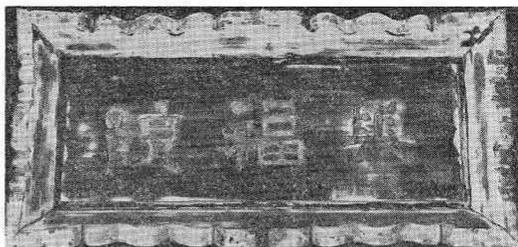
このときにできた殿舎のうち宸殿・文閣などは明治以後旧裁判所内にあつたが、現在は唐招提寺境内に移し保存されている。

東大寺二月堂は、寛文七年（二六七）の修二会の最後の日二月十四日夜の
出火によって炎上した。この復興は例年の修二会のためもあって早急に着
手されることになり、幕府もこれに肩入れし奈良奉行のもとで工事が進め
られ、寛文十年（二七〇）には早くも堂舎が完成した（『二月堂祭』）。さらに不退
寺は法蓮村で五〇石を与えられたが、多宝塔と本堂の修理が行なわれたのはこのころであり、法華寺村と肘塚村で
五〇石を得た十輪院の御影堂の建てられたのもほぼこの期においてであった。

移建・創建の つぎにこの時代に移建された寺として円證寺と興福院とをあげることができる。林小路町に移さ
れた円證寺は、もと筒井順慶の父順昭の邸地と伝えられる地に、その菩提寺として筒井村から天

文二十一年（二五五）に移された。寺領は法華寺村と肘塚村で五〇石であったが、最近生駒市に移建された。

興福院は、寺伝によれば旧名を弘文院といい、院政期（十一・二世紀ごろ）がその濫觴であるという。伏見郷にあ



興福院扁額 文字は小堀遠州筆と伝える（興福院蔵）

って衰退していたのを、天正年中に筒井氏の一族窪庄伊豆守が再興して尼寺としたと伝えられ、江戸時代初期には興福院と改められていたらしい。その第三世光心尼のとき、将軍家光から寺領として新堂村に二〇〇石を与えられ、寛文五年（二六五）から元禄十四年（七〇二）にかけて法蓮の現在地に移建され、山号を法蓮山といった。この作事には小堀遠州が指導に当たったらしく、本堂・客殿・四足門・庭園にその面影を残している。

この時期に新たに建立されたおもな寺院に、小川町の伝香寺と柳生の芳徳禅寺と山村の円照寺とがある。伝香寺は、天正十三年（一五九）に筒井順慶の位牌所として、母尊榮と養嗣子定次によりその一周忌に当たって創建されたもので、棟札によっても本堂と表門は当時の建物であることが明らかである。開山には、唐招提寺の泉奘せんそうが迎えられ、寺領は法華寺村と肘塚村で一〇〇石であった。

芳徳禅寺は柳生家の菩提寺で、寛永十五年（一三八）に沢庵禅師を開基とし、但馬守宗矩が亡父石舟斎宗厳供養のためにいまの場所に建立、寺領は柳生下村で二〇〇石を寄せられた。同寺はそののち宝永八年（一七三一）に全焼の災にあったが、三年後に再建され、本堂には本尊の両側に柳生宗矩像と沢庵像が安置されている。

俗に山村御殿といわれる円照寺は後水尾天皇皇女深如海院宮大通文智公主を開山とする尼門跡の寺である。開山の皇女は梅宮あるいは佐和宮といい、一たんは鷹司家に嫁せられたが、父天皇の帰依深い一絲和尚を師として出家し、名を文智、諱を大通と称した。一絲文守は沢庵を師とし仏頂国師の号をもつ当代一流の禅僧として知られてい



堂本寺香伝

る。宮は出家のち京都修学院に幽棲して円照寺を創建、のちさらに俗縁をい
とって明暦二年（二六六）奈良南郊の八島に擁葉庵ようようあんを結んで幽棲された。ここに
八島の地が選ばれたのは、宮と法縁に連なる淨因禪師の推薦によるものと思わ
れ、領主藤堂家がこの地を寄進したのである。そのうち、宮の信仰が深まるに
つれ寺の整備も進んだが、やがて東福門院の斡旋もあって幕府が現在の山村の
地に寺領二〇〇石（のち一〇石加増）を進めたので、寛文九年（二六九）にここに移った。こ
の地は土地の人によって大楽寺千坊と呼ばれた寺院跡であるところから、ここ
を禪林の制にないら求法の道場としたものであろう。これが普門山円照寺の開
創である。開山の宮はここで修道と芸文に精進しつつ元禄十年（二六七）に七九
歳でその生涯を終えた。そのうち同寺には皇女四代が相ついで入室し、華道山
村御流が伝えられている。なおここにあわせ記さねばならぬのは、文智公主の
ために終始奔走を惜しまなかった前記淨因禪師のことである。知明淨因は河内
の人であるが、一絲門下に入り、正保三年（二六三）に五ヶ谷の高樋に來り、やがて安明寺を再興し、円照寺を守る
役割りを果たしたのである。

これら特別な由緒をもつ寺院のほかに、戦国のころから江戸時代初期にかけて、浄土宗・融通念仏宗・日蓮宗・
浄土真宗系の諸寺が奈良に進出してきたが、これら諸寺については次節にゆずることとする。

寺院の学問

近世初頭の文化の特徴の一つは文教の復興であるといわれる。この現象の一面は、人間性のめざ
めに伴い、中世的な非合理性を退け、諸文化の混在を打ち破るものであって、禪寺のなかからの

朱子学の独立などはその一例と考えられる。文教復興のもう一つの面は古典の再認識とその研究であって、旧仏教系の学問や古典文学研究などの分野でそれはみられた。

奈良は、この時代さすがにわが国の仏教教学の中心であった。戦国時代のはじめには、癡然以来の大徳といわれた東大寺戒壇院の普一國師志玉があらわれて、華嚴教学と戒律をもつて聞こえた。そののちも、奈良の寺院では世情騒然とした中で、なお文筆に親しみ經典の研究を積む僧侶は多かった。たとえば弘治四年(永祿元年一五五八年)に八三歳で没した東大寺観音院の英訓なども、「天下無双ノ学匠也」(之記)といわれた人であった。また文祿二年(一五九三)には、関白豊臣秀次が大和諸寺の僧一七人を集めて『源氏物語』を書写させたが、『多聞院日記』にはこのときのことを「当國諸寺・ナラ中以上十七人被_レ召上_二、其随一トシテ蓮成院社中東地・宮内・中東三人今日欽明日欽上云々、珍事々々題目也」と記している。

さらにつきの事例も南都僧侶の教学の深さをよくあらわしている。槇尾の明忍は当時政治性に富んだ僧の多かったなかで高潔を保つ異彩ある学僧であったが、戒律をおこそうとして西大寺に赴いて律学をきわめてこれを再興した。同様に学僧として知られた嵯峨法輪寺の恭長は、南都に遊学して三論・法相の学を受けた。また家康の側近であった増上寺の源普の弟子に正誉廓山がいたが、かれは家康の命によって慶長十八年(一六三三)奈良に留学した。家康がそのことを一乘院尊勢と喜多院空慶とに託した文に「廓山其地江進候、彼仁取立之僧候之間、不_レ被_レ置_レ心御伝候而可_レ給候」(『本光園』)とある。廓山は浄土宗の僧であるが、奈良で唯識の学を習い、やがて帰って浄土宗を代表して家康の信任を得たのであった。これらからみてわかるように、当時旧仏教が失意の中にあつてその教学がわずかに復興しようとしているといった情勢のもとで、奈良においてはたとえそれは華やかでなくともその伝統は保たれ、南都寺院はほとんど国内唯一の研学の場であつたのである。



隆光像（唐招提寺蔵）

このような奈良にあってとくに学僧として知られた人に、先に記した一乘院門跡尊勢ならびに尊覚がある。尊勢は近衛前久の子で興福寺別当となり学徳高い傑僧といわれた人であり、後陽成天皇皇子尊覚法親王もまた当代の学聖であった。その他喜多院の空慶、東北院の兼祐、東大寺清涼院の卿君らは、法隆寺阿弥陀院の実秀とともに当時奈良がほこる学僧たちであった。それ故にこそ慶長十九年（一六四四）三月には、家康は尊勢・空慶・兼祐・実秀を駿府に招いて三回にわたって法相の論議をきき、四月には江戸城で秀忠もまたこれを聴聞している（『徳川実紀』）。卿君もまたこの年駿府と江戸に召されて華嚴の論議を行なっている（『駿府記』）。家康の南都の学僧に対する評価をうかがうことができよう。

このような南都の教学も、寺社が封建体制のもとにくみこまれるにつれて一般には精彩を失っていくのであるが、なかには直接幕府に仕えて活躍した僧もあらわれた。その代表的な人物としては、將軍綱吉とその母桂昌院の寵遇を得た有名な護持院僧正隆光がある。隆光は添下郡二条村の川辺氏の子として生まれた。唐招提寺の朝意について出家し、長谷寺の亮汰りょうたいに師事し、ついで興福寺の宥ゆう専せんから兩部灌頂を受け、盛源から唯識を学び、法隆寺に俱舎を聞いた。隆光はついで長谷寺慈心院の住持となり、さらに江戸に招かれて知足院住持となり、のち寺地を神田橋外に移して護持院と改めた。元禄八年（一六九三）には大僧正に叙せられ、やがて護持院大僧正とよばれて勢力をふるうようになった。とくに隆光は大仏殿の再興にも力を貸し、近世奈良の寺社の復興には忘れてはならない人であるが、晩年には綱吉の死にあい、失意のうちに宝永六年（一七二九）九月奈良に帰って超昇寺に隠棲し、享保九年（一七三三）

に八六歳で没した。隆光には『般若理趣経解嘲』、『聖無動経慈怒鈔』、『科註尊勝陀羅尼経玄談』などの著書があり、将軍綱吉にもしばしば講釈を行ない、その学識の広さを示している。南都仏教の教学の伝統の力が元禄期にまで及んでいたことを考えさせるものである（『隆光傳』正日記）。

なお奈良の人ではなく、またいわゆる南都の学問ではないが、奈良にあった浄土曼茶羅にひかれて来住した袋中良定がある。袋中は浄土宗鎮西派の学僧であり説教僧であって、『當麻曼茶羅白記』を著し、さらに浄土曼茶羅を求めて元和八年（云三）七一歳のとき奈良に移り、添上郡横井の廃寺を奈良に移建して降魔山善光院念仏寺とした。のち浄瑠璃寺の近く心光庵に入って智光曼茶羅の研究である『浄土寂初曼茶羅略記』と清海曼茶羅の研究『浄土第一曼茶羅略記』とを著した。また注意すべきは、彼が寛永元年（云四）に三笠山麓で近世最初の奈良名所記である『南北二京盡地集』を脱稿したことである（第三節参照）。

美術と芸能

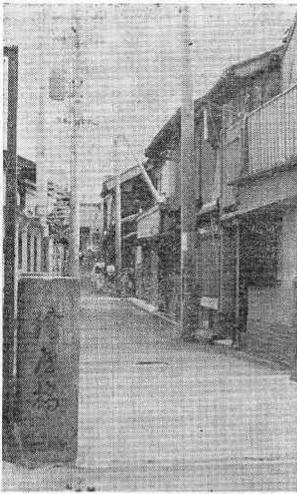
さて、近世初頭の南都寺院の美術を考える場合、まず寺院に所属していた絵所の座をあげねばならない。一般に南都絵所とか春日絵所といっているが、それは興福寺の両院家に属していた絵師の座であった。その第一は大乗院方の吐田座はんだであって、その坊地はいまの半田町辺と推定される。この座の絵師たちは室町時代には相当に活躍し、天文のころ以後にも「琳賢房有清―侍従―琳賢―賢舜」と家系をついでいたことは、『尋憲記』や『多聞院日記』によって明らかで、多くの仏画を残している。なお同じ吐田座の一派で助座を称したものがあがるが、それは一乗院に所属していたらしい。第二に松南院座がある。その居住地はいまの勝南院町に当たるようで、一乗院に属していたがのちに大乗院方にかわり、この時期には系譜も「清賢―尊栄―尊眺」とたどることができる。第三には芝座があげられる。これは元興寺近くの芝の地に住み、一乗院方に属していた。このころの人として慶順とその子三郎の名がみえるが、「東大寺絵所日記」を書いた藤勝もこの座の者であったと思われる。

これらの諸座は、いずれも両院家に属してはいたが、東大寺絵所に各座から加入しているように、その仏画や彫刻・建造物の彩色などの仕事は、春日社・東大寺・手向山八幡宮をはじめ法隆寺など広く近隣に及んだもので、かれらはいわば南都の絵師集団なのである。

しかし戦国動乱から幕藩制の成立期において、これら諸座が本所と仰ぐ院が、所領の改変縮小や諸規制を受けて衰退するにつれて、これまで門跡領のうちたとえ越田尻庄や倉庄などで与えられていた給分を失うなどしてだいに没落していった。この過程で各座はときに援護者をかえたり、分立統合したり、また広く近畿諸社社の仕事に参加したりしながら、やがて解体したと考えられる。いずれにしる近世初頭の絵所座の最後の活動は、中世南都の寺社王国の余光といふべきものであろうか。そして十七世紀に入ると、さらにその系譜や作家の名がたどりにくくなる。おそらくあるものは地方へ離散し、他のものは町の人々のなかに埋没していったのではなからうか。

『奈良曝』に城戸町の絵屋彦兵衛の名がみえ、『奈良坊目拙解』には、元林院町に仏画師竹坊ほか二、三家が住んだのでこの町を俗に絵屋町というとする。おそらくかつての絵所座の人らがここに住んで町絵師化し、絵屋とよばれるように、商人的性格をも持つようになったものである。

こういう町絵師の先駆的形態のものとして襪屋いちぢやの名があげられるであろうが、元林院の竹坊に至ると完全に町絵師になりきっていたようである。そして寺社や町人の注文にこたえて仏画などに筆を染めたが、さらに広く商品の彩色関係にたずさわり、またはその販売にもかかわったかと思われる。一般に肉筆彩色の挿絵のある御伽草子を奈良絵本といい、その絵を奈良絵と呼



絵屋橋（元林院町）

んでいるが、現在のところその名の由来は明らかではないにしても、少なくともこの名がある以上、こういう物語の挿絵が初期において奈良で描かれたからその名が一般化したか、あるいは奈良で描かれたものが数量的に多かったかであろう。いずれにしても町絵師化してゆく絵所座の人々の制作と考えられ、しかも奈良絵と呼ばれたことのないに、その芸術性の高下は別として、権力に召しかかえられた有名画家とは違った奈良の絵師の絵画が、わが国絵画史上に独自の位置を占めることがうかがわれる。

このような院家所属の絵師団とその後の町絵師化のことのほかに、狩野永納は『本朝画史』の中に画僧として奈良の二人を加えている。一人は奈良法眼とよばれた律僧鑑貞で、画法は周文を師とし、唐招提寺総持坊に住んでいたという。いま一人は菩提山報恩院の僧正尊俊で、狩野元信の筆法を学んで仏像および雑画をよくしたと伝えられている。ともに室町時代に属する人と考えられるが、つぎに江戸時代初期に奈良に画蹟を残した有名な曾我二直庵と住吉具慶とをあげておこう。二直庵は堺にいた人で、興福寺と帯解寺にその絵を残し、京都の具慶は円照寺と興福院に精緻な風景風俗図を描いている。京都・奈良・堺という文化圏のことがここにもあるように思われる。

つぎに奈良仏所についても一言付け加えることにする。仏所といううまでもなく仏像彫刻の工房で、その所在によって高天仏所・登大路仏所・下御門仏所などと呼ばれていたが、近世初頭にその銘を残している作例からみれば、下御門仏所・椿井仏所・宿院仏所がとくに注意される。これら仏所についてはなおわからない部分が多いが、天文から永禄のころに下御門仏所に宗貞・宗印があり、椿井仏所に二郎・式部の名がみえ、宿院の仏師としては源次・源三郎・源四郎・源五郎・定正らの名が知られている。『奈良坊目拙解』の宿院町の部に「往年興福寺仏師宿院定政ト云者居ニ于此所、仍チ為ニ宿院家名ニ云、西金堂佛像多宿院定政所作也」とあるが、この定政を極楽坊の地藏菩薩像の作者定正とすれば、かれは天文のころに活動した人であることになる。宿院仏所のその後の事情はよく

わからないが、絵所の座と同様に解体していったものと思われるのである。

江戸時代になってからの仏師の行くえは明瞭ではない。『奈良曝』には小細工彫物屋として数名の名がみえており、それが仏師の系譜を引く明証はないが、彫物師化したと考えられなくもない。椿井春慶が人形を作ったといわれることも参考となろう。いずれにしても解体後の仏師は京都などに移住したか、あるいは彫物師、細工師となっていたのであろうか。

また建築にたずさわった人たちがあつた。ここでは奈良の住人とはいえないが、有名な中井大和守正清(はるい)についてふれておきたい。中井家は、家伝によれば法隆寺四大工の棟梁の一人多門氏が改名した家柄であるという。正清は、はじめは筒井氏に属し、のち徳川家康の愛顧を得て幕府の大工頭となり、一〇〇〇石を与えられて法隆寺村に住んだ。そして駿府・名古屋・江戸の諸城や禁裏・京都大仏殿・東大寺などの作事にあずかるなど、江戸時代初頭の建築土木界に大きな貢献をしたのである。ついでその子正純も寛永度内裏造営の棟梁となり、二代にわたって小堀遠州の最大の協力者であつた。中井家は以来京都御大工頭として五畿内大工を支配することになったのであるが、興福寺、東大寺に所属した大工の座もその支配下に入って地域的な集団となり、奈良に多い寺社の注文にこたえつつ、結局職人として奈良町の町民を構成していったと考えられる。ここにも南都文化圏の寺社建築の高度な技術が近世に及んだ力をみることができ、最高の技術者たちはこのようにして封建権力の下に吸収されていった。芸能も多くは寺社と結びつきながら発達した。それらは神事や法会を賑わすものとして、その発生の由来はともかく、中世寺社で演じられてきた。いまその主なものの近世への流れをたどってみよう。

舞楽は、雅楽寮に属した京都の北京楽人と奈良の寺社に所属した南京楽人と撰津天王寺の天王寺楽人のいわゆる三方楽人によってその伝統が保たれてきた。北京楽人は多氏がこれを伝えて神楽および右舞をもって朝廷や寺社に



舞楽面 江戸時代作 陵王・抜頭・還城楽 (春日大社蔵)

仕え、南都方は春日・興福・東大の寺社に奉仕するほか朝廷や京都の寺社にも出仕し、左舞を専門として狛氏と芝氏がこれを伝え、天王寺方は右舞を主としてきた。しかし奈良には石清水八幡宮所属の大神姓楽人を迎えて右舞を行なう家もあった。ところが中世末期の戦乱のなかで北京楽人が離散したため、後陽成天皇のとき天王寺楽人を召し北京楽人を補強して右方舞を担当させ、南京の左方舞とならんで朝儀を復興させたという。そして天正十六年(一五八)の聚楽第行幸の折りには盛大な五番の舞楽が行なわれた。古代以来の舞楽の伝統は、戦国の嵐のなかを南都の楽人によって維持し得られたといえる。もちろん南都でも苦しいときはあったようである。天正八年(一五〇)の春日若宮祭礼のとき、舞楽の抜頭面がないので願主人の筒井順慶が東大寺に使いを出してさがさせた話などは、このことを証明している。

江戸時代については、『春日神社文書』のなかに慶長十六年(一六二)の楽人からの書上げがあって、当時奈良楽人は三九人で、春日社・興福寺などの儀式に勤めていたことがわかる。やがて幕府は、寛永十九年(一六四二)に楽人七人を江戸に下向させて神君家康廟に奉仕する紅葉山楽人を組織したが、南京方からはこのなかに三人が含まれていた。ついで寛文六年(一六六六)には、幕府は楽所料を楽人に与えて身分の安定に資したが、『京都御役所向大概覚書』によると、三方楽人各一七人で、所領は大和の平群郡で二〇〇〇石となっている。この状

態で幕末に及んだもので、南都寺社文化の動向がここにもうかがわれる。

つぎに中世寺院で盛んに行なわれたものに延年舞がある。これは、寺院内の遊宴で法会のものに演じられたものであり、その歌舞も一定せず雅楽や猿楽や田楽をはじめ風流・今様ふりゆう いまようなど各種の芸能がとり入れられたものであった。その様式は時代がたつにつれて形式が固定化し、また演じられる寺院も南都北嶺の寺院に限られるようになるが、とくに奈良の寺院、とりわけ興福寺の維摩会のとのが有名となり、延年舞は「奈良ニテアル事也」(『三条西実さんじょうせいじつ』)とい

われるほどであった。これに関する記録は『大乘院寺社雑事記』や『看聞御記』などにはしばしばみえるが、近世にはほとんど資料は見当たらず、ようやくその痕跡を伝える程度になったものと思われる。

延年舞と同じく近世に衰退したものに田楽がある。古代末期から中世における田楽は非常に盛大であり、その初期には京都白川の本座に対し、奈良のは新座といわれたらしいが、室町時代にはすでに奈良に本座・新座があり、春日若宮祭や手掻会・小五月会に奉仕していた。そしてこのころ猿楽能の影響を受けて一忠らの名手を出したが、やがて猿楽に押されて衰え、奈良では春日若宮祭にその名残りをとどめ、他の地方では民俗芸能としてその姿を残しているに過ぎない。

社寺の芸能として近世にその伝統の姿をとどめるにすぎない上記の諸芸能とはちがって、この期に盛んであったものは能楽である。能楽は猿楽能の完成したもので、歌・舞・音曲の調和総合された芸術である。室



田楽法師一座 内藤其洵筆

町時代の初期にはすでに、金春・金剛・宝生・観世のいわゆる大和の四座は成立し、やがて興福寺の修二会における新能と春日若宮祭礼の後日能に奉仕し、大乗院の天満社小五月会などに出演することもあった。それが室町將軍家の保護のもとで、観阿弥・世阿弥親子および金春禪竹らの力によって能楽として大成した。こうなると、能楽はこれまでどおり奈良の寺社と密接していたのは当然ではあるが、他面では新興武士あがりの大名たちが競ってこれを愛好するようになった。こうして能楽は、やがて武家の式楽にまでなるのであって、能楽の隆盛は、この武士の後援に負うところが多大であった。ことに秀吉はこれを好み、文祿二年（一五九二）十月には三日間も禁裏でこれを開演し（〔三編〕院記）、十一月の春日若宮祭後日能には天文以来はじめて大和の四座を揃わせて、金春大夫は五〇〇石の知行を与えられている。能楽の全盛期がここに来たのである。

多彩な文化の展開

御伽草子と

禅文学

中世末期から近世初頭にかけてのわが国の文学は、その文学性において一般に高いという評価はあまり受けてはいない。それは動乱の世相のなかで、かつての文学の担い手であった貴族僧侶の社会が斜陽化した当然の結果でもあろう。

そのなかで一応注意すべきものとしては、散文文学に御伽草子がある。その多数の作品の作者については、現在のところ一条兼良らの名が伝えられるほかはほとんど不明であって、多くは公家や僧侶らの手によるものと考えられている。ただその挿絵がさきにふれたように奈良絵といわれて奈良絵所系の人々がこれにかかっていると推定できることと、当時奈良の寺社が公家衆を迎えて文運の中樞をなしていたことなどを思うと、その作者のなかに南

都の僧侶がいたと考えることも可能である。ともかく御伽草子の世界は、たとえその題材が古典からとられようと
神社の縁起を土台としていようと、地方説話をもとにしようと、すでに貴族僧侶だけのものではなかった。そこに
はむしろ庶民の夢が語られていると解するならば、奈良の町の人々もまたその読者であったかもしれない。

つぎに中世末期の文学のなかに、異色のあるものとして禅林に育った詩文、いわゆる五山文学があった。禅宗と縁
故の薄し奈良においてはとくに語るにたるものはなかったが、十七世紀になって建立された奈良の禅刹、すなわち
円照寺や芳徳禅寺をめぐっての禅文学は注目する必要がある。円照寺開山の大通文智が豊かな文藻を持つ人であっ
たことは有名で、ことに漢詩にひいで、その詩集に『擁葉集』が残されている。その七絶の一つをあげよう。

五更欲覚鐘聲

月落西窓影尚明

曾道老来山裡好

幸居邃洞夢長清



沢庵像（芳徳禅寺蔵）

大通はまた詩のほかに和歌や書道、絵画などにも堪能であった。文筆にすぐれた浄因禅師をはじめ大通をとりまく人々とともに、円照寺は一種の文芸境を形成していたともいえる。なお大通にとっては、一乗院門跡尊覚法親王は叔父に、真敬法親王は弟に当たり、ともに文才もあり能筆の文化人であった。したがって京都の朝廷や一乗院との間にも密接な文化の交流があったのである。

芳徳禅寺の開基となった沢庵禅師は、流罪が赦免と

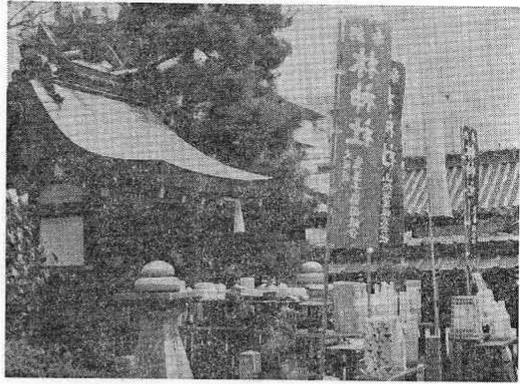
なつてのちは多く江戸に住むこととなり、そこで柳生宗矩との交遊が深められたのであるから、この寺が直ちに禅文学の舞台となったわけではないが、柳生には禅師の思想的影響は大きいものがあつたといわねばならず、その遺風をここにみる事ができる。なお沢庵は奈良にとつて他にも因縁があつた。「南都年中行事」などによると、元和のころであらうか、沢庵は京都大徳寺の内紛をさけて奈良に住み、林小路の漢国社の境内に隠遁の幽居を求めて大和の風物を楽しんだ。寛永年中に近衛信尹が吉野遊覧の帰途ここを訪ね、庭前の桜にちなんで芳林庵の号を与えたといひ、一乘院門跡尊勢筆の銘額があつた。沢庵が去つてから、この芳林庵には宇陀の泉見禪寺の見蔵、ついで賢外が入寺し、天和三年（一六六三）にこの寺は船橋町に移された。芳林庵こそは南都禅法道場のはじめとなつたものである。しかしこの寺は、宝永年中に芳林寺と改め、まもなく廃滅している。

和歌の伝授

奈良のこの時代の文学を考える場合、これを代表するものは、物語でも禅文学でもなく、やはり和歌・連歌をあげるべきであらう。

和歌の世界は、中世以来ことに古今伝授によつて特徴づけられていた。それは戸田茂睡によつて「渡世のたより」と非難されたように、没落していく貴族が大切に守りつづけた権威の一種であり、それ故にこそ自由な発想を妨げ歌道を衰退させたものではあるが、奈良はその最後の輝きをみせる場所を提供したのである。それは、和歌が長い間公家の社交の文学であつたために、奈良が公家の都である京都と不可分の関係にあり、鎌倉時代以来奈良の和歌がすでに伝統をもつていたこと、応仁の乱後疎開の公家衆を多く受け入れたことなどによるものであるが、同時に奈良に寺社を中心としてできていた僧侶・神職・上層商人・武士たちの社交界があつたことにもよるのである。

歌道の古今伝授は東常縁（とうつねより）から宗祇に伝えられたのが初めといわれるが、宗祇から三条西実隆に伝えられ細川幽斎に及ぶいわゆる御所伝授に対し、宗祇から肖柏をへて林宗二に伝わるのを奈良伝授といつた。宗二は渡来人の子孫



林神社大祭
漢国神社の摂社で、毎年4月19日には全国の菓子業者の人たちで祭礼がおこなわれる

事也」と記している。

古今伝授の奈良への流入には、もうひとつの経路もあった。すなわち宗祇から徳大寺実淳を経て春日の社家東地とち井祐範いすけのりに伝えられ、以後祐長、時康、祐用へとつづく辰市家の伝授である。祐範は近世初頭の文学者であり古典研究家でもあって、三条西実枝からは歌を学び、自らは『日本書紀』『伊勢物語』などを講じている。そして彼から辰市家の書紀伝授が始まり、祐長も家学をついだ。なお古今伝授という場合、その本流とみられる御所伝授においても、細川幽齋が三条西実枝からそれを受けたのは、天正二年（一五七四）多聞城や春日社においてであった。

で、林氏は代々饅頭屋を業としていたので饅頭屋宗二として知られ、奈良の林小路に移り住んだという。宗二は肖柏から和歌の伝授を受けたほかに連歌をも学び、清原宣賢について儒学を修め、吉田兼右からは神道も学んだ当代の代表的な文化人の一人であった。かれには『源氏物語林逸抄』の著があり、唐宋詩文の抄写一〇〇余冊も残しているが、有名なのは饅頭屋本『節用集』である。これによって彼は当時の百科辞書の著者といわれるのであるが、『節用集』には明応（一四九二）の奥書きのあるものや文亀年間（一五〇三）のものもあるところからみれば、宗二はこれを増訂したものであろうか。いづれにしろ彼は奈良の学芸に大きな足跡を残したのであって、天正九年（一五八二）に八四歳で没したが、『多聞院日記』には「マンチウヤ宗二死了、天下無比之名仁、悲歎無_レ限

和歌の伝授がこうして奈良の歌学を盛んにしているとき、奈良には十市遠忠という武士出身の歌人があった。彼はいうまでもなく大和武士十市氏で、春日の神人となり、国民と称して大乗院に属していたが、その歌人としての作は『十市遠忠自歌合』『十市遠忠百首』として『群書類従』や『続群書類従』に収められており、その歌は三条西実隆の流れをくむとも考えられる。彼はまた書をもよくした文人であって、天正四年（一五七六）に没したが、その弟栄弘も洛北高雄に入り、和歌を好んで、その上手であったといわれている。十市兄弟だけではなく、奈良にはこれより少し前に文人古市澄胤もいた。大和武士が南都の文化的雰囲気の中で風流の道をたしなんだことがうかがわれる。

奈良ではこのように広い範囲の人々による和歌の世界があり、歌会もしばしば開かれている。『多聞院日記』からその一例を引いておく（天正十二年十一月七日の条）。

去三日於大乗院哥會當座在之、近衛大閤御成ニテ點アリ、御短尺古ニ見せ被下了、題ハ探也ト、

朝鶯 春としもまたしら雪に鶯や
をのれおとらぬ今朝のはつこゑ

龍山近衛殿

郭公 待ほとは過てなにその郭公
それかあらぬか明るしのよめ

尋憲御門主

藤 吹風にあつら多つけてよせ帰る
をとを木す多の松の藤なみ

理阿仁木有梅軒

江螢 くるゝより入江の水のをちこちに
跡したひつゝとふ螢かな

祐繁

（下略）

奈良の連歌 この時代の文学としては実は和歌よりも連歌がその主たる位置を占めていたといえる。それは和歌と 紹 巴 歌がすでに早く定型化し、精彩を失ったのに対し、連歌は和歌から貴族社会のなかで座興として

遅れて出発しながら、花下連歌といわれるように、地方に広がって地下じげの人たちに受け入れられた新しいジャンルの文学であったからであろう。そしてこれが『二条河原落首』にあるように都鄙にかかわらず流行し始めると、自然その作法に式目が考えられ、ついに二条良基によって応安新式が作られ、ここに連歌の和歌なみの定型化が試みられたのである。連歌における伝授の発生もこのような事情に基づくもので、ここに連歌道が成立した。

奈良と連歌は早くから深い因縁をもっていた。良基につづく高山宗砌は、興福寺の衆徒である添下郡の鷹山氏の出であったといわれるし、春日社家の人々や大乘院門主の経覚や尋尊らのグループのなかでも連歌は盛んに行なわれ、連教師宗祇や兼載もしばしば奈良に来ていたのである。このような状況のうえに奈良は里村紹巴さとむらしよはを送り出すことができたのである。

紹巴は一乗院の坊官松井昌祐の子で(もと松村氏ともいう)一時興福寺明王院に入ったと伝えられるが、のち周桂に連歌を学びついで里村昌休に学んで里村氏を称し、臨江斎また宝珠庵と号した。天文の末年ごろ京都に移ったらしいが、故郷の奈良へはしばしば帰って連歌会を催している。その居宅は『奈良坊目拙解』の南市町の部に「紹巴厘敷 謂中ノ通北側東廉家」とあるが確証はない。彼は京都移住後いよいよ有名となり、昌休の子昌叱とともに当代の連歌壇を背負って立ち、不世出の連教師といわれたのである。彼はまた織田信長に接近し、細川幽斎や明智光秀らとも親しみ、豊臣秀吉に用いられて全盛を誇ったが、秀次謀叛のことに座して、一時三井寺に配流された。没したのは慶長七年(一六三〇)らしくその墓は極楽院(元興寺極楽坊)にあったという。かれの著述には『源氏廿巻抄』『狭衣下紐』など古典に関するもののほか、連歌書としては秀吉に進上した『至宝抄』をはじめ『連歌教訓』『連歌法度』などが

ある。また和歌の古今伝授は近衛前久によって許されていた。

このように日本の古典文学に対する造詣がいわば連歌師の教養であったと同時に、連歌が各地の土豪たちにも受け入れられて地下の文化となっていた事からも想像できるように、連歌師は常に各地を往来しつつ連歌会を催したから、彼らは文化運搬者の役割をも果たしていたわけである。奈良は京都・堺との連絡もよく、紹巴の故郷でもあったから、連歌会は頻繁に開かれ、当時にあつては奈良が連歌の一中心をなしていた。いまそういう連歌会の一例として、天正二十年(文禄元年 一五九二)四月に催されたものを『多聞院日記』から引用してみよう。

此間紹巴六十九才、古郷(へか)之無余命之間、暇乞ニ下トテ方々へ入、明日乗珎興行ニテ連哥在之、

をのつからちりなき苔のしけり哉

紹巴

夏山ちかみ雨はるゝ庭

乗珎

郭公ゆふへの月に聲まわちて

覚祐

(下略)

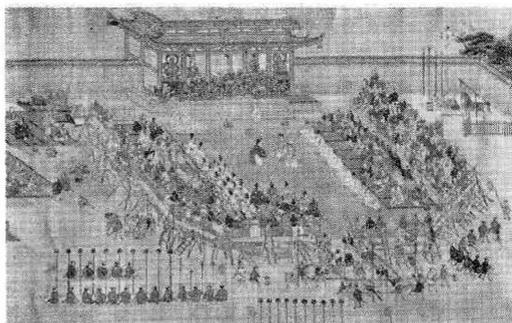
奈良では連歌会が非常に盛んであつたが、そのことは奈良に連歌をたしなむ人々が多かつたことを物語る。寺社関係の人たちのなかでは連歌はすでに一般教養であつたようで、ここにあげた乗珎などはその優れた代表者であり、社家の祐範もまた紹巴と親しく、長く高林寺にいた真言僧心前もまた連歌七賢の一人といわれた。また町の人には前記の宗二があり、南市の弥五郎は「おもかげをうつすや月の朝こほり」とものして紹巴の称賛を受けている。なお紹巴一世の名作といわれた句が『多聞院日記』にみえる。

昌叱息六才ニテ死時、弔連哥、子ノ名ヲ菊ト云

根さへかれて春に若葉の菊もなし 紹巴

此発句紹巴一世ノ出来事也ト根さへかれてハ本哥ありト

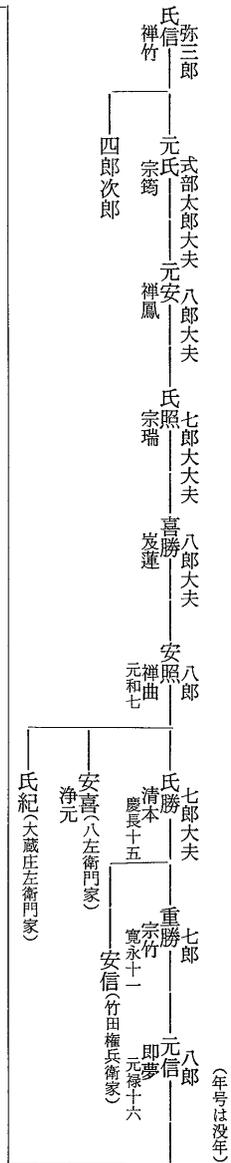
連歌はこの時期の奈良の社交界を賑わす文学であつたのである。



興福寺新猿楽図「春日若宮祭礼絵巻」（春日大社蔵）

の三座が毎年二座ずつ交代で奈良で演能することが定められた。薪能は本来興福寺の修二会新迎えの行事に付随するもので、もとは堂衆によって興行されたが、応永の初めごろ（十四世紀末期）には衆徒がこれを主管して四座が揃って演じるようになり、場所も金堂ではなく南大門で行なわれるようになっていた。さらに一章で述べた慶長十年（一六〇五）の惣年寄の一件からみると、このころには郷民の見物も許され、奈良の行事の一つとして盛大になっていたことが察しられる。しかしこれには幕府の援助があり奉行所がかかわっていたことや、町民に強制的な負担がかかることなどによって、かえって町民のものとしての親しみが薄い傾向があったことは否定できない。それは春日若宮祭の松の下の行事について、やはり奉行所がこれに関与するようになったことと同様な傾向にあったといえよう。

この伝統の行事新能を実質的に支えてきたのは、奈良に在住した金春座であった。金春座は大和四座中でもとくにその来歴は古く、興福寺に所属し竹田座または円満井座と称したが、十四世紀ごろから金春座（今春・今晴）と名のり、やがて禅竹に至ってその基礎が確立した。江戸時代には観世流が四座の筆頭とされて幕府に密着し、新興喜多流などもおこつてとかく押され気味ではあったが、なお奈良の能楽としてゆるぎない位置を占めていた。なお喜多流は、元和四年（一六二〇）に武士出身の喜多七太夫がはじめて一派として認められたが、七太夫は金春流の門人であった。さて金春座の相承系譜はつぎのとおりである。



右のうち、喜勝は天文年間に金剛座と上席争いをしたことで知られたが、多くの謠本を書き残しており、弟子には素人役者として知られた本願寺の坊官下間少進仲孝があった。つぎの安照のころは金春座の全盛期であって、秀吉・家康の援助もあり、その芸風も『当代記』に「今ノ世ニハ今春八郎大夫ニ昔残りケルカ」とあるように古雅な特徴を發揮して他派を圧倒していた。こののち、安照の次子安喜は本家から知行を分与されて金春八左衛門家をおこして尾張藩に仕え、三男氏紀は大蔵庄左衛門家の祖となって仙台伊達家に仕官し、安照の孫安信は竹田権兵衛家をたてて加賀前田家に仕え、それぞれ金春の芸風を伝えた。奈良の本家は氏勝以後相承して現代に及んでいるが、この間重勝の代には江戸に屋敷を与えられ、元信のころには家元制が確立したようであり、氏綱はよく家書を整理して多くの記録を残し、広成は明治維新ごろの名人として知られている。なお『奈良曝』には役者中所付として、貞

享四年（一六七）ごろに金春座を構成していた人たちがつぎのように列举されている。このなかには金春家の支家で大蔵流を名乗った狂言や鼓の家の人や金剛流の人も含まれていて、当時の奈良の能楽の座の状況がうかがわれる。

高天町	知行二百石	今春 大夫	高山町	金春ノ太鼓	金春久四郎
納院町	知行五十石	大蔵 大夫	子守町	金春ノ地謡	藤井権右衛門
今辻子町	知行百五十石	金春座大夫	割石町	金春ノ太鼓	大蔵市兵衛
横椿井町	金春ノ小鼓	大蔵 八右衛門	南半田中町	金剛ノつれ	高安 彦太郎
納院町	金春ノ狂言	大蔵 八右衛門	北半田東町	金剛ノ大鼓	春藤 二郎兵衛
本椿井町	金春小鼓	大蔵 重兵衛	紀寺町	金剛ノつれ	長命 次郎大夫
漢国町	金春太鼓	金春 又次郎	魚屋東町	金剛大鼓	春日 喜右衛門
高天市町	金春ノつれ	金春 清兵衛	北半田横町	金剛地謡	高安 孫右衛門
今辻子町	金春ノ笛	長命 吉右衛門	北半田横町	金剛地謡	高安 次左衛門
不審が辻子	金春ノ太鼓	大蔵 茂左衛門	杉ヶ町	同	桐野 伊兵衛
川端町	金春ノ地謡	遠藤 清左衛門	南風呂ノ辻子	同	日吉 九兵衛
西新屋町	金春ノ太鼓	中村 小兵衛	天満うら町	同	金右衛門
高山町	金春ノ地謡	大蔵 又蔵	此外ハ江戸住宅		

近世における狂言は、すでに大蔵・鷲・和泉の三流が確立していて、金春禅竹の孫弟子日吉万五郎が金春座に属して大蔵流の祖となっている。したがって奈良では金春座とともにこの派の狂言が主流をなし、能とともに演じられたが、勸進狂言のような形で狂言だけが演じられた場合もあった。たとえば元禄年間には蓮長寺でその修理のために行なわれ、大倉弥右衛門と大蔵八右衛門が出演している（『奈良坊』）。

近世における能楽者には、幕府の庇護のもとにあった喜多流を加えた五座や、各大名にかかえられた専門の猿楽

の座人にかぎらず、一般武士や公家・社人・僧侶・町民などもあり、その中には能・狂言や謡・囃子に堪能な者が多かった。ことに奈良では祢宜に多くの優れた能狂言の役者があり、素人というよりはむしろ専門家に近いもので、祢宜能とか祢宜狂言といわれるほどであった。『奈良曝』をみると、祢宜役者として大夫には若宮弾正以下六人、脇八人、狂言二人、笛五人、小鼓一五人、大鼓八人、太鼓四人があげられ、このほか地謡数を知らずとある。この多数の祢宜は中世神人の子孫で春日社の祿は得ていない人々であったといわれる。また町民のなかにもこの道の達人が多く輩出したのである。

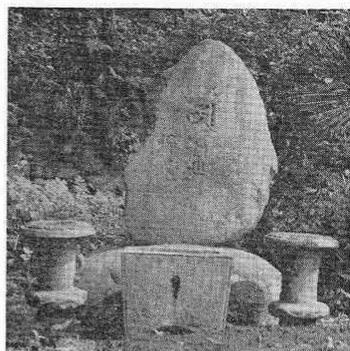
こういう専門の座人以外の人々の能は、手猿楽ともいわれて史料にしばしばみえるのであるが、やはり目立つのは勸進能の名で興行されたものであった。たとえば天正八年（一五八〇）三月に郡山で勸進能が行なわれたときには、京都のトラヤ・ササヤが招かれているし、同十四年六月に豊臣秀長が郡山で催したときは地下の者が参加している（『多聞院日記』）。奈良でも宝永八年（正徳元年一七一〇）二月に称名寺本堂再建のための勸進能が北市町の人家裏で興行され、田中素秋が太夫となって「道成寺」が演じられ、享保十六年（一七三三）三月にも同所で姫路孔雀太夫が「道成寺」を演じている（『奈良坊目抄』）。このような例は他にも多い。いまひとつ勸進能でない例をあげてみよう。寛永十六年（一六三九）九月に前関白近衛信尋が南都に下向し、雨のため奈良見物を中止して一乘院で猿楽を興行した。このとき舞の名手として奈良で知られた祢宜の弾正が招かれたが、「次／＼同しすかたに烏帽子ひたたれきて五人坐したり、其次にまちことにうたふものとして、普通ノ長袴きて二人座ニ着、次二郎兵衛とて笛ふくもの、これも町人也、小鼓は治部といふ祢宜、大つつみは少三郎といふ町人、太こ是も亀介とかやいふ町人也」（『本源自性院記』）と記録されている。祢宜や町民のなかにかに能の上手が多くあったかがわかる。狂言でも光明院町の山田八郎右衛門重高は文化十二年（一八二五）に大蔵弥太郎から奥伝を受けたといわれ、のち森川杜園がこの流れを受けたのであった。

能楽は狂言をはじめ難方・素謡をも含めてこのように盛んであった。武家の式楽となつて諸座の演能は重んじられ、大名のない奈良町ではそれは薪能と春日若宮祭を主な舞台としてつづけられてきた。またその影響のもとで町のなかの能楽人口も多く、町人たちの見物も賑わつた。近世奈良の能を代表する金春座は古雅をもつて特色とし、大藏流の狂言は中世狂言を最もよく伝えたといわれ、ともに全国に誇り得るものであった。しかしこれは何として武家社会への依存度の高いものであったから、中期ごろからはようやくその精彩を失い、民衆もまた自らの芸能として他の雑芸または歌舞伎の方に関心を移していったようにみえる。

茶会の隆盛 近世初期の南都社交界を象徴する文化には、なお重要なものとして茶道があった。奈良は、室町と茶道 具 時代に茶道という芸道を成立させたと伝えられる称名寺の珠光を生んだ土地である。ただ珠光に

ついてはその伝承に明らかでない点もあるが、茶道がこの時代に成立し、珠光がそれにひと役を果たし、奈良がそのための環境をなしていたことは疑えないであろう。珠光はおもに京都で活動し、その子は宗珠といつて京都下京に住んでいたが奈良屋と称していたし、奈良には珠光の知友松屋源三郎がいて当地茶会の中心をなしていた。また風流人古市澄胤もこの道に知られた人であった。このような伝統のうえに近世奈良の茶道の隆盛がくることになるのである。

天文のころ(一五五〇)から元和・寛永年間にわたる約一〇〇年間は、茶道の全盛期であった。そしてこの時代の茶会は、京都・奈良・堺の茶人たちが互いに招きあう形で、茶会はいわば当時の権力者たちのかげひきの場となり、彼らを交じえた文化人の風流教寄を競う交遊社交の場でもあった。その茶会の盛んなことは『多聞院日記』の天正七年(一五七九)正月の条に「茶湯都鄙僧俗以外増倍」とあることにもうかがわれる。またさきに記したように北野の大茶会には、奈良から多数の人々が参会した。そしてこれら茶会に集まる人たちのなかには、単に茶人であるだけで



長 闍 堂 墓 (興福院)

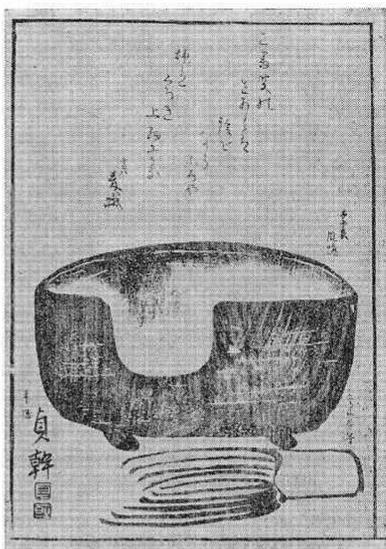
なく、和歌や連歌をよくし古典に通じている者や学問芸術に秀でる者、また参禅する者なども多かった。このことがまた茶道の内容を豊かにし、茶道をして一種の総合芸術の観をもたせ、ついには茶禅一味というような精神修養の性格さえ強めさせることともなったのである。そして茶会に出入する人々も、公家・僧侶・神官から武人・豪商に及び、この中からはこれを専門とする者も生まれてきた。

奈良はこのように多芸な茶人をもっていた。東大寺四聖坊をはじめ、一乘院尊勢・大乘院義尋・喜多院空慶・清涼院卿君ら寺家の人々や奈良奉行中坊秀政らもしばしば慶長・元和のころに茶会に列しているが、その中心になっていたのは松屋久重であった。松屋は久政・久好・久重とつづいて奈良の茶会をひきいたもので、その記録である『松屋会記』は好個の記念史料である。

そのころ奈良の佗茶人として聞えていたのは春日の祢宜久保権太夫利世であった。利世は号を長闍子といい、野田の邸前に茶屋をたてて長闍堂と名付け、茶事に関する『長闍堂記』一卷を残し、寛永十七年(一六四〇)野田の山荘に七〇歳で没している。長闍堂に関する茶事や茶器などについては世上多く伝えられるところがあり、数寄に徹した物語も多い。その茶室は俊乗坊重源の影堂の古材によって作ったもので、のち解体されて東大寺の公慶のもとに入ったが焼失し、その後古凶によって興福院の内に再建されて墓碑とともに現存する。茶道のうえで長闍堂と交遊の深かった人には、藤堂高虎・松平忠明らの大名、大徳寺の江月和尚などがあり、とくに小堀遠州と松花堂昭乗との往来が知られている。松花堂は洛南男山の滝本坊の社僧で、書画をはじめ花道・茶道・作庭など芸術万般にわたっ

てすぐれ、本阿弥光悦とともに当代第一流の人物であり、数寄の達人でもあった。長闍堂が松花堂と接するようになったのは、松花堂の兄中沼左京亮元知が一乘院の坊官で茶人でもあったため、かれを通じてであったかと思える。いずれにしる昭乗は、幼時を奈良大豆山の中沼家に過ごしたといわれ、長闍堂との交遊の深さからも奈良の茶道史に欠くことのできない人物である。

江戸時代の奈良の町は武士の都ではなかったから、奉行中坊秀政のほかには、大名や武士の茶人はほとんどあげ難いが、奈良に何らかの因縁のある人、あるいは現奈良市域外で南部文化圏に含まれる地域の人々の中には、この道に有名な武士たちがあった。古くは松永久秀や筒井順慶も茶をたしなむ風流人であったし、郡山城主であった豊臣秀長はことに文化人として聞こえただけに茶道も愛好し、郡山は一時その中心の観をなしていた。また芝村・柳本両織田藩の祖となった織田有楽斎長益は利休門七哲の一人に数えられ、大和布施城主桑山一晴の叔父宗仙は茶湯の名手として聞こえ、宗仙門下の小泉藩主片桐石見守貞昌は石州流を開いている。さらに小堀遠州も奈良としては忘れられない人物である。小堀遠江守政一は近江の出身であるが、秀長に仕えて一時郡山に住み、のち伏見に移り住んでやがて徳川家の庇護を受けた。建築造園の巨匠として知られるが、ことに茶道に嗜み深く当時の文化人との交遊の間に万能芸術家として大成し、設計施工についてはもちろんのこと、弟子の養成などにも抜群の指導力を発揮した。その業績は、内裏・仙洞御所をはじめ城郭から諸寺院に及んでいるが、とくに茶室・作庭にはその名が高い。何らかの意味で彼がかかわったかと思われるいわゆる遠州好みと称される遺産の多いことも彼の高名を示すものである。奈良については興福院の造営がその確かなものとして重要で、奈良とはことに縁故が深かった。彼の周辺には片桐石州・松花堂昭乗・長闍堂・松屋久重・中井大和守正純らがあって、茶道による一つの社交界を形成していたといえるであろう。



奈良風炉と茶笥 『大日本名産図会』

て当然考えられることで、釜環が奈良環と呼ばれて茶人の珍重するところであったというから、その製作の優秀であったことが察しられる。

つぎに陶器については、中世には五条山に西京土器座があったから、茶道の需要に応じて近世初頭に奈良風炉が生産された。風炉師として著名であったのは永禄元年（二五五）に没した西村善五郎宗印であった。そのうち西村家は宗印の子宗善が界に移り、三代宗全が京都に移住したけれども、その作った土風炉はなお奈良風炉と称されたところからみて、その作のよさと奈良の伝統の重みとが思われる。そのほか西の京の土風炉師として活躍した松本宗四郎は三代宗全の弟で、秀吉から天下一の号を受け、「天下一宗四郎」の印を用いたが、のち、秀忠に招かれて江戸に移ったといわれる。『茶器名物集』（天正十六年一五八八）には「奈良風爐 西京宗四郎・五徳奈良ノ天下一休息ニ有」とある。また『和漢三才図会』（正徳二年一七二二）にも、

茶道の發達隆盛にともない茶道具の生産が盛んとなったが、奈良はこの点でも多くの名手や名器を出している。松屋は塗師を業とし蒔絵で名を知られていたが、ほかに紹鷗のもとに應じていた塗師で、棗を塗る妙手として知られていた篠井秀次（善斎）と、利休につらなる塗師で天下一秀次と称されたその子の二代秀次（善鏡）があった。また漆工樽井藤元とその子藤重・藤敵もその道の達人であり、ことに茶器の修補に巧みであったといふ。また茶釜の製作も中世に鍋釜座があったことからみ

茶爐 茶爐

俗云風爐

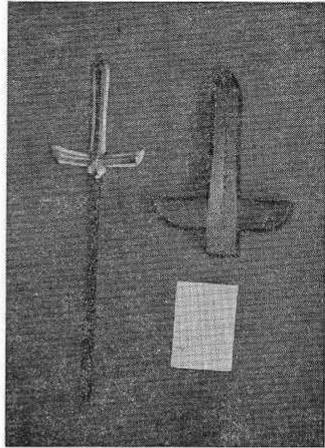
按茶爐所図奈良風爐也、

陶工称天下二宗四郎

とある。寛文十年（一七〇〇）に郡山の俳人岡村正辰が撰した『大和順礼集』には、大和石見の歴然の句として「奈良風爐の茶の湯の炭も飛火哉」が収められてあり、『大日本名産図会』には、「三番叟のささらは鈴をならふるや、焼色くろき上細工かな」とあって、黒色の風炉が上細工とされている。しかし、元禄九年（一六九〇）の貝原益軒の著『和州巡覧記』には「風爐今ハ西の京と云所に在ル下手也」といわれるようになっていいる。

茶筌の製作の来歴については不明なことが多い。この製作の特技は、いままも生駒市北倭の高山に伝えられているが、このあたりは良質の竹の産地でもあり、おそらくここで始められいまに及んでいるものと考えてよいであろう。高山は中世では一乗院方衆徒である鷹山氏の根拠地であったが、その伝えによれば城主鷹山大炊介源頼秀の弟高山宗砌が珠光と交じわって茶筌を創始したという。この宗砌が連歌師として名を知られた宗砌と同一人であるという確証は現在のところないので、ここでは伝承として扱っておく。『京都御役所向大概覽書』には、正徳六年（一七二六）改めとして、茶筌師はすべて高山で庄右衛門以下一三人の名があり、茶筌一本代は銀一匁二分から銀五両までとある。いま各地で使われているほとんどの茶筌の生産地がこの高山であることは、あの盛んな奈良の茶道の伝統を残すものとして重要であろう。

宝蔵院流 奈良は、以上のように神社と関係深い教学や文芸の点で、わが国における近世初頭の文化の一つと新陰流 の中心をなしていたが、武の道でも特筆されるものがあつた。

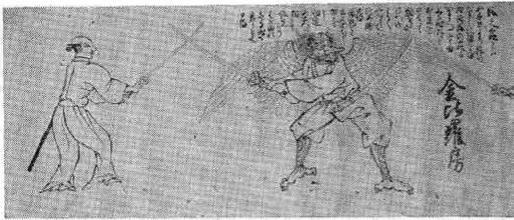


石見守藤原正直の作と伝える十文字槍

多ク打死之中ニ、(朱中村新兵衛) 鍔り中村ト名ヲ取タル人之ハタラキハ、古の弁慶モカクヤト皆人申侍也(之記)と特筆されるほ

どであったが、この中村氏が胤榮に用いられて、十文字槍の槍術が創案され、宝蔵院流として知られたもので、寺中には道場も開かれたといわれる。いづれにしてもその名声は天下に高かったが、胤榮は慶長十二年(一六〇七)に八七歳で没した。その門弟にはさきの中村氏の家系にかかり宝蔵院の家宰ともなった中村市右衛門尚政や奈良の日蓮宗の僧興蔵院某らがあった。また中村市右衛門(中村派祖)の高弟、高田又兵衛(小倉藩に仕官高田派祖)の子三人が江戸で講武所に出仕し、いわゆる宝蔵院流の高田派をひろめた。胤榮の法嗣禅栄房胤舜もこの槍術の奥義を得、先師の作った表十五か条に対して裏十一か条の槍法を創案し、二代宝蔵院と称された。『本源自性院記』によると、胤舜は寛永十六年(一六三九)に奈良に來た前関白近衛信尋に十文字槍の技を披露している。以後三世覺舜房胤清、四世堂山房胤風、五世乗識房胤憲以下宝蔵院法嗣が代々この槍法を伝え、江戸時代を通じてその高名の伝統を保ったのであって、胤風は享保年間に江戸でその槍術を上覧に供している。なお胤舜の門下に宝蔵院流下石派の祖となった下石平右衛門三

まず興福寺宝蔵院の名を世に知らせた宝蔵院流槍術をあげねばならない。こういう寺院と武術とのかかわり合いの伝統は、古く僧兵にまで遡るかもしれないが、直接には中世末期の戦国動乱のなかでの興福寺衆徒の武士化活動に連なるものである。この槍術の一流を開いたのは宝蔵院院主覺禪房胤榮である。胤榮は興福寺衆徒中御門氏の出身で当院主となったが、早くから刀槍の術を好んだという。かつて永祿十年(一五六七)の大仏殿炎上に際し、槍の中村新兵衛の働きが人目をひいた。「人



『新陰流兵法絵日録事』宝永4年（宝山寺蔵）

正があるが、彼は郡山侯松平忠明に仕えている。

胤舜について修業した長尾家が代々宝蔵院流の槍の道を伝えたことを示す長尾撫髪翁碑（天明八年が東京雜司ヶ谷にある。）

奈良の武芸を考えると、中世以来の南都寺社とは直接にはかかわらないとしても、柳生の剣道はあまりにも有名である。柳生家は代々柳生にあって郷邑を保つことに努めて、但馬守宗敵（石舟斎）の代となったが、宗敵は剣を磨きすでに一流の剣客として知られていた。宗敵はやがて宝蔵院胤栄とともに劍客上泉伊勢守秀綱について神陰流の秘奥をうけ、その劍名は柳生の名とともに世に聞えるようになった。やがて宗敵は秀綱が達し得なかつた無刀の兵法の工夫に成功して新陰流と号することを認められたが、この流はついで柳生流といわれ、て発展するのである。

宗敵は晩年家康に招かれたが、その子但馬守宗矩を推し、慶長十七年（一六三〇）に没している。宗矩はこうして劍師として幕府に仕え、三代將軍家光にはとくに知遇を得て、柳生一万二五〇〇石の大名にとり立てられ、柳生藩の祖となったが、その次第はすでに述べたとおりである。宗矩は柳生流劍技に優れていたのはもちろん、禅に通じ、劍禅一致の妙境に達していたといわれ、政治についても、つねに家光に助言したという。宗矩の禅は沢庵禪師に負うものであって、沢庵を開基として亡父の菩提のために建てたのが芳徳禪寺であった。宗矩は正保三年（一六四〇）に没した。その長子十兵衛三敵もまた父祖にまざる劍豪といわれた人であるが、家は第三子宗冬がつぎ、以後代々將軍家の劍道指南役をつとめ、江戸時代を通じて劍の柳生の名は天下に響いていた。なお宗敵の長子に敵勝があり、その子利敵は同じく劍の道で尾張徳川藩の師となつて、尾張柳生家を開き、子孫代々

これを伝えて幕末に至っている。

柳生にはなお長谷川流樺術が伝わっている。その来歴はつまびらかではないが、兵部卿法印靈照の署名で長谷川武英に与えた兵術書が残されており、樺術が民間武術としてこの地方で行なわれ、長谷川家がその中心をなしていたものであろうか。江戸時代の末期に長谷川金右衛門がよく樺を使ったといい、子孫数代にわたり、同氏の門は賑わったといわれる。このような武道は、奈良の武具・刀劍の生産とも関係深いものであろうが、それについては第二章に述べたとおりである。

第二節 近世文化の諸相

寺社の盛衰

東大寺・手向山 元禄の時代に大仏が修理され大仏殿が再建されて、奈良が空前の賑わいをみせたことはすでに述べた。この大仏の復興事業を機として、東大寺ではさらに堂舎の建立されるものがあり、寺全体として整備が進んだ。

大仏铸造工事の途中、大勸進職の公慶は、東大寺の本願である聖武天皇をまつる堂宇のないことを嘆き、勸進所の中に聖武天皇像をつくり安置する計画をたてた。そこで、元禄二年（一六九）に安井門跡道恕の家司であり仏師で